

土木逆風世論の真実  
「沈黙のらせん理論」による大衆心理分析

東京工業大学大学院 正会員 藤井 聡

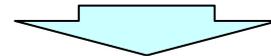
とは決して考えない。

それはなぜか——。本稿ではその理由を、「世論」というキーワードを政治心理学的に論じつつ、述べることにしたい。

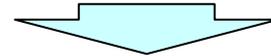
沈黙のらせん理論

世論が形成される社会的ダイナミズムを説明する諸理論の中で、少なくとも今日、最も影響力を持つ社会科学上の理論は「沈黙のらせん理論」であろう。これは世論形成過程を次のようなものと仮定する理論である (c.f. 藤井, 2003; Noelle-Neumann, 1982)。

**step 1)** 人々は自らの意見が多数派であると認識すれば、自らの意見を公表する傾向が向上する一方で、自らの意見が少数派であると認識すれば、孤立を恐れるあまり、自らの意見を公表する傾向が低下する (すなわち、沈黙する)。



**Step 2)** かくして、社会の中で公表される意見は“自らが多数派であると認識している人々”の意見ばかりとなり、少数派であると認識している人々の意見はほとんど聞かれなくなってしまい、ますます“世論意見”の人々は自らの意見をより声高に公表する様になる一方、“非世論意見”の人々はますます沈黙するようになる。



**Step 3)** 以上の“らせん”(スパイラル)により、非世論意見の人々の多くは世論意見に“同調”し、非世論意見から世論意見への意見を転向することとなる。

この理論が意味するところを直感的に理解するには、「裸の王様」の寓話を思い起こすことが得策であろう。裸の王様の寓話では、誰もが王様が裸であることを理解している。しかし「他の人」が黙っているから、という**ただそれだけの理由で**、人々は王様が裸とは言えず沈黙してしまう。しかしながら、王様が裸だと言わずに沈黙を保つことそれ自体が、知らず知らずのう

民営化委員会“騒動”

平成 14 年度、道路関係四公団民営化推進委員会(以下、民営化委員会と略称)はマスコミを大いに賑わした。7 人の委員を昔の映画のストーリーになぞらえて解説する等、土木学会に直接関連するニュースの中では珍しく大衆の情動に働きかけるような報道がなされた。このことは、土木学会会員であるならば誰もが印象的に記憶しているであろう。

その委員会の一委員である中村氏は、土木学会誌の平成 15 年 3 月号に掲載した論説の中で、委員会での議論、ならびに、そこで氏が主張した民営化案とその合理性を紹介しつつ、最後に次のように論じている(中村, 2003)。

「最も合理的であり、すぐれた改革が実現する途であると私が考えるにもかかわらず、委員会では少数意見であり、また、いくつかのマスコミ等では支持されなかったのは何故かと考えずにはいられない(p. 8)」

そして、この理由として社会資本が概ね充足してきたこと、土木関連の不祥事等を起因として生じた**世論**が演じた役割の大きさを指摘した上で、

「私たちがなすべきことは、行すべき事業はその必要性を国民の多数が納得できるような優れた分析的な評価手法を作り出し、その過程と結果を透明性高く示すという地道な途しかないと考えるのである(p. 8)」

と論述している。

言うまでもなく筆者はこの主張に大いに賛同する。恐らくはこうした地道な努力をやめた瞬間に土木事業は永遠に合理性を見失うこととなる。だからこそ、こうした学術的な地道な努力は絶対に不可欠である。しかしながら筆者は、

「... という地道な途**しかない**」

表1 賛否意識と会話傾向・主張傾向との相関係数

「賛否意識」と「会話傾向」の相関係数<sup>†</sup> = -0.081 ( $p^{**}$  = .037)  
 「賛否意識」と「主張傾向」の相関係数<sup>†</sup> = -0.120 ( $p^{**}$  = .002)

サンプル数 = 680

<sup>†</sup>スピアマンの順位相関係数(-1~1間での数値で, 0に近い程関係が無く, その絶対値が1に近い程強い関係があることを示す。なお, 符号が負の場合は, 一方が大きい場合にもう一方が小さくなる, という関係があることを示唆する)

<sup>\*\*</sup>この相関係数が「0」である, つまり, 両者の関係が全くない, という統計的確率

ちに他の人々に「無言の圧力」を与えてしまう。かくして沈黙が沈黙を呼び、拳げ句に万人が王様が裸であることを理解しながらも、誰もが王様が裸であるとは言えない風潮が蔓延してしまう。そして、一部の欺瞞に満ちた“お調子者”が、「王様は素晴らしい衣装をまわっていらっしゃる！」と(それが嘘であると知りながらも)言い出す始末となる。何とも残念な状況であるが、これこそが、“世論”の正体である、というのが沈黙のらせん理論の主張するところである。

この沈黙のらせん理論は、戦後日本の民主主義を含めた近代民主主義の深刻な“虚構”と“欺瞞”を告発する強大な力を秘めた理論であることは、その提唱者であるノエル・ノイマン自身が認めている(藤井, 2003)。すなわち、沈黙のらせん理論には“民主主義理論の礎となるような「知的で責任感のある市民」という理想像を否定するもの(Noelle-Neumann 著・池田, 安野訳, 1997; p. 232)”が内在されているのである。

## 賛成者の沈黙

こうした「沈黙のらせん」は、土木事業を巡る世論においても生じているだろうか。これを確認するために、本稿では、筆者が2001年(すなわち、民営化委員会以前)に京都市在住の人々を対象に行った土木事業についての賛否意識調査のデータを分析することとした。この調査では、京都市民から無作為抽出した1600世帯に調査票を郵送配布し、郵送にて680票(回収率42.50%)を回収した(詳細は矢野ら, 2003参照)。

調査票では、

「あなたは、政府・行政の土木事業を支持しますか？」

と質問し、それぞれについて“強く反対”を1、“どちらとも言えない”を4、“強く支持”を7とする尺度で

測定した。これを、賛否意識と呼ぶこととする。同様の方法で、認知世論として、

「世間の人々は、政府・行政の土木事業を支持していると思いますか？」

を尋ねた。さらに会話傾向として、

「普段、政府・行政の土木事業について身近な人と話したことがありますか？」

を、そして、主張傾向として

「政府・行政の土木事業についてのあなたの意見を主張したことがありますか？」

をそれぞれ、同様の方法で尋ねた。

ここで、表1に、「賛否意識」と「会話傾向」「主張傾向」との間の相関係数をそれぞれ示す。これより、賛否意識と会話傾向、主張傾向との相関係数は、有意に負であることが分かる。つまり、土木事業に賛成意見を持つ人は、その意見を“主張”することがないばかりか、身近な人々と会話することすらしない一方、土木事業反対の人々は身近な人と好んで土木事業の話をするばかりではなく、(世論の虎の威を借りて)人前で雄弁に自説を語りたがるのである。すなわち、土木事業の賛成意見を押しつぶす雰囲気、民営化委員会の1年前から既に充満していたと考えられるのである。これはまさに、沈黙のらせん理論から予想された結果である。

## 虚構の逆風世論

さて、沈黙のらせん過程が進行すれば、耳にするのは土木事業に反対意見ばかりとなる。それ故、人々は、「世間の人々は皆土木事業に反対なのだ」と、実際以上に過度に思いこんでしまう。すなわち、人々の“認知世論”(他の人々がどのような意見を持っているか、という予想)は、人々の賛否意識を実際に集計したものよりも土木事業により否定的であることが理論的に予想される。

ここで、この理論的予想を確認するために、認知世論と賛否意識の平均値を比較した。その結果、表2に示したように、理論的な予想に一致して、認知世論は実際の人々の賛否意識よりも低かった。その両者の差が統計的に意味のあるものか否かを検定したところ、両者の差がたまたま生じたという確率は、0.1%以下で

表 2 賛否意識と認知世論の平均 (サンプル数=680)

「賛否意識」(あなた自身が, 土木事業にどれだけ賛成しているか)のサンプル平均	3.86 (1.52) <sup>†</sup>
「認知世論」(他の人がどの様な賛否意識を持っているか, の予想)のサンプル平均	3.69 (1.22)

<sup>†</sup>( )内は標準偏差

表 3 属性別の賛否意識の平均

女性(130人)のサンプル平均	3.62	“どちらとも言えない”よりも有意に低い (t=3.05, p=.003)
男性(533人)のサンプル平均	3.92	“どちらとも言えない”と有意差なし (t=1.24, p=.22)
若年層(~40才:78人)のサンプル平均	3.30	“どちらとも言えない”よりも有意に低い (t=4.76, p<.001)
中年層(40~60才:276人)のサンプル平均	3.64	“どちらとも言えない”よりも有意に低い (t=4.31, p<.001)
高齢層(60才以上:308人)のサンプル平均	4.19	“どちらとも言えない”より有意に高い (t=2.04, p=.040)
朝日放送ニュース視聴者(419人)のサンプル平均	3.74	“どちらとも言えない”よりも有意に低い (t=3.46, p=.001)
朝日放送ニュース非・視聴者(237人)のサンプル平均	4.07	“どちらとも言えない”と有意差なし (t=.696, p=.487)

注1: 賛否意識の定義 1=強く反対 4=どちらとも言えない 7: 強く支持

注2: 表中の p とは, 平均が 4 である, つまり人々の賛否意識が “どちらとも言えない” という水準とは異なる, という確率

あることが示された ( $t$  値=3.68,  $p < .001$ ). すなわち, 統計的には明らかに認知世論の方が, 実際の意見分布よりも低い水準なのである. 言い換えるなら, 土木事業に対する人々の意見は, 人々が想像するほどには否定的なものではない. 我々の直感に反して人々は “意外と” 土木事業に対して肯定的なのである.

その点をさらに確認するために, 今回のアンケートで回答者に回答してもらった属性データを用いて, 属性別に人々の賛否意識を集計してみた. その結果, 表 3 に示すように, 確かに, 性別でいうならば女性, 年齢で言うならば若・中年層, そして, 接触しているマスコミで言うならば朝日放送のニュース視聴者は, 土木事業に対して否定的な意見を形成していることが示された. しかしそれら以外の人々, すなわち, 男性, 高齢者, そして, 朝日放送のニュースを視聴していない人々に関しては, 土木事業に対して否定的な意見を形成していないことが分かる. むしろ, 性別や接触マスコミに関わらず年齢が 60 才以上であれば土木事業に対して肯定的な評価を下している (賛否意識が 4 以上である) のであり, 性別や年齢に関わらず朝日放送のニュースを視聴していない人達は (賛否意識が 4 以上であることから) 土木事業に対して肯定的な評価を下しているのである.

なお, 以上の分析で, 特定の放送局のみを特に取り上げたのは, 本データを用いた土木事業に対する賛否意識についての包括的な統計分析より, 「NHK と日本テレビ, 朝日放送, 毎日放送, フジテレビの計 5 つの中で, 特定の局のニュース番組の視聴の有無だけが土

木事業の賛否意識に影響を及ぼしており, それ以外の局のニュース番組の視聴は統計的な影響は全く与えていない」という結果が得られたためである. もしこの点にご興味をお持ちの場合は別著 (矢野ら, 2003) に詳しく論じているので, そちらを参照されたい.

いずれにしても, 客観的な分析に基づくなら, 人々は必ずしも土木事業に対して否定的な意見を持っているわけでは決してない. この事実は, 少なくとも土木事業に携わる立場にある者であるなら, 忘れてはならない事実なのではなからうか.

### 合理と理念

さて, 以上の分析が物語るのは, 次のようなことである. すなわち,

人々は土木事業に反対しているであろうと誰もが予期している. そして, 土木事業への賛成意見を押しつづす無言の重圧が存在している. この意味においては確かに “逆風世論” は存在する. しかし, 実際の意見分布は必ずしも土木事業に反対ではない.

以上を踏まえるなら, 逆風世論の正体とは, 実際の人々の意見分布にあるのではない. それよりはむしろ, **一人一人が心の中に持つ「逆風世論が存在している」という誤った認識**こそが逆風世論の正体なのである. 沈黙のらせん理論が予測するように, その認識こそが賛成者の沈黙と反対者の雄弁さを導き, 逆風世論とい

う虚構を築き上げている。そして、その認識が存在する以上は、ますます沈黙のらせん過程が加速し、そのうちに Step 3)の状態、すなわち、**本当に**大半の人々が反対となる日が来てしまうかも知れないのである。

幸いにして本稿で示したデータは、少なくとも 2001 年では世論は既に Step 3)に至ってはいるもののその進行は未だ完全ではないことを示唆している。なぜなら、否定的な意見を形成している人々がいるとしても、それは必ずしも全員では決してないからである。

もしも沈黙のらせん過程の完全なる進行を食い止めることが公共と社会のために真に必要なのなら、冒頭で引用した中村氏が主張されている様に、公共事業評価の合理的方法の開発による地道な努力は不可欠であろう。

しかしながら―――，

誠に遺憾ながらも、沈黙のらせん理論が予想する様に“世論”は人々の合理的な判断のみで動くのでは決してない。孤立への恐怖や他者への同調といった非合理性に支配されたものこそが大衆の世論の正体なのである。その事実をかみしめるなら、まず第一に必要なとされているのは、世論に媚びる事無く、勇気を持って、

「王様は裸だ！」

と真実の声を上げることに他ならない。かの寓話の中で、裸の王様の虚構が暴かれたのも、まさにその一声であったことを思い出してほしい。世が世なら「沈黙は金」なのかもしれない。しかし、欺瞞がはびこる世では、沈黙は欺瞞に荷担する共犯行為に他ならない。

裸の王様の虚構は、子供ですら見透かせる程の単純な真実であった。それ故、“真実を暴く一声”に対する世論の反発は小さかっただろう。しかし、土木事業の必要性が仮に真実であっても、その真実は子供が単純に見透かせる程に容易なものではないかもしれない。それ故、その一声を上げる以上は、様々な反発を生むことを覚悟せねばならない。だからこそ、その一声は、十分な説得力を携えた発言でなければならない。

そのためにも、中村氏が主張するように、合理的分析の蓄積が必要であることは論を待たない。しかしながら、沈黙のらせん理論が明らかにするように、合理では割り切れないのが人間の判断である。だからこそ、

土木事業の合理的な必要性を訴えかけるだけではなく、土木計画が目指している**理念を一人一人に訴えかける**ことこそが求められているのである。人々がもしその理念に心の底から同意するのなら、無言の重圧をはねのけてでもその理念を身近な人々と語り、それを主張することすら厭わなくなるかもしれない。もしも多くの人々がその様に振る舞うのなら、土木逆風世論の虚構は崩れ去るのかもしれない(藤井, 2003)。

だからこそ、その日に向けて「私たちがなすべきこと」とは、“合理的”な計画論を考え、それを透明性高く公表するということばかりでは決してない。あるべき地域のかたち、あるべき国土のかたちを、過去の長い歴史を踏まえながらも、遠き将来を見据えた上で国民と共に考え、国民に語りかけること、それこそが「私たちがなすべきこと」に他ならない。

孤立への恐怖と不安を乗り越え、ともすれば世論に媚びてしまいがちとなる自らの心情を戒めつつ、毅然と、かつ、冷静に、発言すべきことを発言し続ける。それによってはじめて、誰もが真実を口にできる健全な世論が訪れる日がくるのかもしれない。

#### 参考文献

- 藤井 聡 (2003) 社会的ジレンマの処方箋：都市・交通・環境問題のための心理学，ナカニシヤ出版。
- 中村英夫 (2003) 道路公団 4 公団民営化推進委員会の議論と私の考え，土木学会誌，2003 年 3 月号，pp. 2-8.
- Noelle-Neumann, E. 著 (1982) 池田謙一・安野智子訳(1993) 沈黙のらせん理論：世論形成過程の社会心理学。ブレイク出版。
- 矢野晋哉，藤井聡，須田日出男，北村隆一：土木事業に関する賛否世論の心理要因分析，土木計画学研究・論文集 20 (1)，pp. 43-50, 2003.